

## 喘息について

咳が長く続くと、喘息を心配する親御さんが多いものです。それは、喘息とはどんな病気なのでしょう。多くはアレルギーによるもので、アレルギーの反応として気管支の細い部分(細気管支)に炎症が起り、過敏になり内腔が狭くなる状態です。炎症を起し過敏になつているのでから咳や痰が出るのもちろんですが、内腔が狭くなるのでヒューヒューやゼーゼーするだけでなく、息苦しさがあるので特徴です。極端に狭くなると発作と呼ばれる呼吸困難となることがあります。

同じような症状はウイルス感染によつて起ることがあり、咳が続き、ヒューヒューするからといって喘息と断定できるものはありません。喘息の診断には重症な発作を起した、毎月のように繰り返す、治療に長い時間がかかる等が、診断の重要な根拠となります。子どもの喘息の多くは、アレルギーが原因なので、喘息の確

定のためにはダニやハウスダスト等のアレルギー検査が有用です。また、アレルギーは遺伝するので、家族のアレルギー疾患の存在も参考になります。しかし、アレルギーというのには不思議なもので、同じアレルギーを持つからといって、皆同じ病気になるとは限りません。ある人は鼻炎だけ、またある人は鼻炎と喘息というふうに、同じとは限らないのです。

最近では乳児の喘息が問題になり、喘息診断される時期が従来より低年齢化してきました。これはスギ花粉症などでも同様です。乳児はウイルス感染で喘息と同じような症状がみられることが多く、喘息の診断はなかなか困難です。喘息のガイドラインでは、ヒューヒューゼーゼーを3回繰り返した場合は、乳児喘息と診断すると示されています。特に乳児喘息の場合、初期に治療を開始することが将来の重症化を予防することの見解もあります。

喘息の治療は急性期治療と長期管理があり、症状を起さない長期管理が必要です。最近ではアレルギーの反応をおさえる経口薬とステロイドの吸入が有効で、治療効果を挙げています。症状が軽快した後も、気管の炎症は持続しているため、カゼなどのウイルス感染によつて容易に悪化することがあります。発作をゼロにすることはもちろんですが、長期管理によつて炎症をゼロにすることが重要と考えられるようになってきました。親御さん達は症状が無くなつてしまつと、どうしても薬を中止したくなる傾向があります。また起る可能性を予防するための長期管理ですから、自己判断で治療を中止することは厳禁です。医師の指示を守つて、止めていいと言われるまで継続することが重要です。

余談をひとつ。「咳が続いて、検査をしたら喘息と言われた」、「反応が強いから、重症の喘息と言われた」というのを耳にします。しかし、病名は症状や経過から付くもので、アレルギー検査はアレルギーを見つけ、反応の強さを判断

するものです。アレルギーの検査が陽性だから、直ちに喘息と診断できるものではなく、検査値も必ずしも喘息の重症度と相関するものでもありません。検査は費用がかかるものです。検査の結果がでたら、十分な説明・指導を受けることが重要です。

ナビゲーター

小児科専門医

川村 和久

仙台市在住



医療法人社団かわむらこどもクリニック医院長。日本の小児科サイトを運営する、言わずと知れた小児科専門医。「お母さん達の心配・不安の解消」を理念に、日々の診療にあたった。宮城県小児科医会理事。2001年には医師として大変名誉のある日本小児科学会バネリストとして選ばれる。

AERA(アエラ)臨時増刊号 日本初! かかりつけ医を探すガイド「日本の家庭医 08」(7月5日号)の町のお医者さん1435人の中で紹介される。

<http://www.kodomo-clinic.or.jp/>

★「サンタさんがお休みが欲しいからかな〜」 美亜(5歳)

Mamagon 06